講演

日本と漢學の思想

文學博士　小柳司氣太

私の演題は「日本と漢學の思想」といふのであります。漢學といふ事は今日まだ多少生命を有つて居る言葉のやうに考へる。英學とか蘭學などといふ言葉は、今日餘り誰も使ふ人はない。「私は英語を習つて居る」といふ人はありますが、「英學を修業して居る」といふ人はない。又獨逸學、佛蘭西學などといふ言葉もあまり行はれず、況して蘭學などに至つては、勿論死語として居る。然るに漢學といふ言葉が、尙多少社會に生存して居るやうに考へる。例へば「あの人は漢學を以つて鍛へた者である」といふ事になつて來ると、善い方から申しますれば非常に律義者であるとか、大變淸廉潔白な者であるとか或は節義の堅い人であるとかいふ聯想が浮ぶと同時に、惡い方からいふと極頑迷固陋であるとか、極貧乏であるとかさういふ惡い聯想も浮ぶ。兎に角漢學といふ言葉がまだ社會に於て、十分存在を許されて

居るやうに考へる。最も段々近頃は「東洋學」「支那學」といふ言葉も流行します。所謂歐羅巴では、「シナロギー」といふ言葉も使ひますが、併しながらその所謂支那學といふものの、今日主として研究されて居る所は、即ち多く支那の地理か、歴史で、或は古物の發掘などであります。即ち具體的の研究が、その主なるものになつて居り、例へば「シャバンヌ」「ペリオ」「コルデヤ」或は「ジャイルス」など多く其方面の學者であります。固より支那の文典、文學、道教、儒教などに關して、歐州學者の著述は頗る多いけれども、之を前述の歴史、地理方面に比するときは、餘程遜色があります。即ち歴史、地理などに關しては、歐人の造詣頗る深うして、吾人の參考となるべきものが多くあるやうに見受けるが精神的の方面、哲學思想であるとか、倫理の方面に至れば、あまり大した貢獻をなして居るといふ譯ではない。要するに支那學では、吾々のいふ漢學といふ意味を十分に言現はす事が出來ないやうに考へる。尤も私共が大學に居る時分にも漢學科といふ學科がありました。當時私共は「漢學などといふは古めかしい、段々何事も文化發達の時代であるから、大摑みに漢學などといふ言葉よりも、寧ろ例へば支那の文學又は支那の哲學などといふ風に、矢張り分類して研究しなければならぬ」といふ唱導をしたものであつて、隨て今日では、無論大學では漢學といふ學科は無くして、支那文學、支那哲學、支那史學などといふものになつて居ります。併しながら支那文學、支那哲學、支那史學といふものを引包めて見

た所に、何やら其處に一つの漢學といふ、一種のあるものの存在が認められ感ぜられるやうに考へる。國學なども同じ譯であつて、國學と申しても、日本の文典を研究するのも國學であるし、日本の制度、法律、歴史を研究するのも國學でありますが、さういふものを引包めた外に、一種の精神的のものが存在して居るやうに私は考へる。さういふ意味から單に支那の經學とか、支那の文學とか、支那の歴史といふものを統一した一つの上に、さういふ漢學といふ一種の精神的のものがあるやうに考へる。さういふ意味からして今日でも、漢學といふものは捨てる事の出來ない、一つの意味のある重要な言葉と、私は考へる。

それで一體漢學が、日本へ何時頃來たかといふと、御承知の通り應神天皇の時代に入つて來たのであるが、それが日本の學問となつて、名は漢學であるけれども、實は日本の學問とも謂はるゝほど融合せられたといふやうな譯になつてしまつたのであります。其歴史的の事實を聊かお話しすれば、例へば昔の王朝時代の學問を見ますに、經書が朝廷に修められた學問の科目になつて居ります。又時々詩經、書經、其他の經史を進講せしめられ、或は顔氏家訓、蒙求、文選などといふものも進講を命ぜられて、天子が之を御聽きになり、なか〳〵當時漢學が流行つたものであつて、中には文選を暗誦したといふ事で歴史に名を傳へられた學者もあつた位であります。然るに國學の方はどうかと申しますと、どうも私共

の見る所、日本書紀は進講といふ事があつたやうに考へるけれども、他の書物に就いての進講は無いやうに考へる。要するに學問といつたならば、漢學であると當時一般に考へられて居る。

隨てずつと朝廷に於かれても、此漢學を重んぜられて、御歷代さういふ風になつて來たが、特に明治天皇に於かせられては、漢籍が非常に御好きであつたものと見えて、時々學者を御呼出しになつて、經書を御聽きになりました。例へて其一端を申しますれば、どういふ經書を御聽きになつたかといふと、書經、大學、論語、詩經、易などであります。さうして常侍の學者に於て、最も明治天皇の知遇を辱うした人は、元田永孚先生でありました。此永孚先生の進講錄といふものを德富蘇峰さんが編纂しました。即ち元田先生が明治天皇に御進講申上げた筆記の或者をまとめて、一冊の本としたものであります。又明治天皇樣が明治十三年に大阪と名古屋との鎭臺の對抗演習の際、御統監遊ばさるゝ事となりまして、伊勢の方に行幸になつた時に、其地方の中村栗園といふ學者を御呼出しになつて、孝經の講義を御聽きになつた。左樣に一面に於ては軍隊の演習を御統監遊ばさるゝと同時に、一面では學問に御心を御用ゐになつて、さういふ學者を御呼出しになつて、孝經の講義を聞し召されたといふ事は、まことにありがたい事であります。又前に申し上げた元田永孚先生は、非常に德の高い學識の勝れたお方であつたものと見えて、其當時の色々の人の說を聞きますと、元田先生が明治天皇樣を御佐け申した功績は、

決して彼の大久保公或は木戸公或は伊藤公、さういふ政治上の赫々たる功績を奏した人にも讓らないやうな事で、冥々の中に君德を御佐け申したお方であるといふ事を聞いて居りますが、兎に角さういふやうな譯で、明治天皇樣に於かせられては、漢學を矢張り御好きになつたものと承つて居ります。斯ういふ御製があります。其の題は知れませぬが、私は御製の意味から考へて見ますと、確かに漢籍の事を御作になつたものでないかと思ふ。どういふ御製でありまするかといふと

傳へ聞く國の寶となりにけり
ひじりの御世の詔ぶみ

或は漢籍の經書のやうなものを御詠みになつたものと、私共考へます。さういふ譯で歷代の皇室に於ては、漢學を非常に御奬勵になつた事であります。今上陛下また攝政宮殿下に於かせられても、同じ事であるやうに拜承する次第であります。

又飜つて日本の歷史を見ましても、六國史を始めとして多く皆漢文で書いてありまして、特に日本書紀の如きは、最も漢文の成句熟語を非常に餘計用ゐてあります。其一二の例をいへば、例へば今上陛下の詔勅にもありましたが、我日本の國體の尊き事を仰せられて「義は即ち君臣にして情は猶ほ父子のごとし」即ち日本の國體は、臣民との關係が一面からいへば君臣であるけれども、一面からいへば親子

の如き親みのある者であるといふ事を仰せられてあります。それは即ち、實は日本書紀には雄略天皇樣の詔勅となつて居ります。一體舍人親王が何處から此句を持つて來られたかといふと、隋の文帝の詔に見えて居ります。其事は日本書紀集解といふ書物にも記されて居りますが、段々遡つて見ると、後漢書の光武本紀の中に見えて居ります。又彼の用明天皇紀に『天皇信佛法。尊神道』とあるにつき、平田翁は此神道とは皇極天皇紀の「順考古道」といふ事であるといつて居られますが、抑々此「古道を順考す」といふ事は經書の開卷第一の「曰若稽古」といふ言葉の註譯であります。之を舍人親王が御用ゐになつた次第であります。その他の事に就いては、私はかつて「東亞研究」第五卷第二號に於て「國史と漢文」とに於て論じた通り日本の歷史は非常に漢學と關係が深いのでありまして、漢學が分らないときは日本の歷史も十分意味の解けない所があらうと思はれる。況して當時の制度法律は多く漢土のものを眞似したものであります。固より日本の國體上からして斟酌せられた所がありますけれども、大體は唐時代の法律の模倣したものといつて差支ない。曾に又そういふ法律ばかりでない、當時の議論を見ても矢張りさうであります。例へば三代實錄、清和天皇樣の貞觀十三年に於て清和天皇樣の太皇太后が崩御になつた。天子樣はどういふ喪服を御着になつたら宜からうかといふ事に就いて、當時の學者の議論が見えて居る。其議論の基く所はどうでありますかといふと、矢張儀禮の喪服傳、或は左傳、或は公羊傳

などを引證して居ります。されば唯此當時の王朝時代に於て漢學を用ゐられた事は、徒に泰平を粉飾するといふばかりでなくして、それを實際の政治の上に用ゐられた譯であります。況して又文學の方面になれば、今日まで傳はつて居ります經國集、懷風藻乃至本朝文粹など見たならば、如何に漢學が其當時盛んであつたかといふ事が分る譯であります。

斯の如く漢學が日本に來てさうして恰も川の土堤を決するが如く、澎湃として日本の國にひろがつたのは、一體どういふ譯であるか、固より當時日本に於て之に對抗するだけの文化が無かつた事も一つの原因でありましようけれども、併しながらもう一歩進んで考へて見ますと、此漢學の精神と日本の國民精神と自ら相同じき所のものがある爲に、行はれ易くあつたのではないかと思はるゝのであります。例へば其後佛教が日本に來ました。又近年になつて耶蘇教が日本に來ました。矢張り佛教が來た時にも、幾多の衝突が歴史に見えて居る。蘇我氏或は物部氏の爭といふやうな事が起り、固より蘇我氏物部氏の爭は、單に佛教のみならず其當時の政權の爭がありましようが、兎に角國民思想と佛教との間が確と合はなかつたから、あゝいふ事が起つたのである。又耶蘇教が日本に入つた時にもさうであつて、今日でも耶蘇教が十分に日本に同化したとはいへない位である。然るに漢學の渡來に於ては、さういふやうな事は無いのであつて、すら〳〵と巧く日本の國に入り込んでしまつて、而かも亦歴代ずつと之を持堪へ

て來たといふ事は、矢張り我輩の考に依れば漢學の精神とそれから日本の國有の精神と、相一致する所のものがある、言ひ換へると漢學が日本の國民精神に相合して居る所があるのではないかと斯う思はれるのであります。それに就いて少しくお話をしようと、斯ういふ譯である。

色々お話をする事は、澤山ありますけれども、先づ日本の道、日本人の道といふものは何か、教育の勅語に「斯ノ道ハ實ニ我皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ」といふ事を仰せられてある。その抑々道といふ事に就いて第一に私は考へて見たい。道といふものは要するに道路の義から取つた。本居翁の說に依りますと所謂「みち」の「み」といふ字は附字であつて「ち」は即ち路である。日本では「やまぢ」「くがぢ」「こうぢ」、路の事をみな「ち」と申します。之を人間社會の上に應用したものである。此外に道といふ義はない、さうしてその我國の道はどんな所に記錄せられて居るかといふと、古事記、日本紀等の國史に於て十分に現れて居る。其以上に道といふものはないと斯ういふ譯である。其古事記、日本紀にある所の道は、何であるかといつたならば、いろ〳〵ありましようけれども、之を概括したものは私の考としては、教育の勅語であります。此道が日本の道である。其外に吾々臣民の守るべき道はない。故に勅語にも、「斯道ハ」と仰せられて居る、あれが間違ひない道である。道路から一轉して、人間の行ふべき道となつたのであるといふ、本居翁なり平田翁の說がさういふ說であると、私共は思ふのでありま

す。然らば則ち漢學の道とは、何であるかといふと以上陳べた事と相違がない、道路の義かじら轉たものであります。論語や孟子にもさういふ風になつて居る、「誰能出不レ由レ戸、何莫レ由二斯道一也」と此文意は誰でも出入するには、戸口から出入する、窓を破つたり垣根を破つたりして出入する者は窃盗などの外にない、吾々人間として行くべき道を何故守らないかといふ事であります。又孟子などにも「道は大路の如く然り」といつてあつて、總て漢學に於て道は、道路から起つて居る。吾々が歩く時は道路に由る、其通り人間が此世を渡つて行く時に、人間の行ふべき道がある。其道に依つて行かなければならぬと、斯ういふ譯である。されば伊藤仁齋などの說に依つても、「道は猶ほ路の如し、人の往來する所なり」と說き、素行先生なども「人の行くや必ず道あり、故に人間が此世に處するにも、必ず道がある唯道に大きい道と小さい道とある、正しい道と正しくない道がある、枝道と幹道とある」と說いて居る。道といふものは、天下公共の道である、例へば此の東京の本郷の大通は、上は王侯大夫の貴きより下は乞食に至るまで通つて惡いといふ事はない。あれは高貴の人の歩く道である、お前達の歩く道ではないといつたならば大問題が起ります。それは天下公共の道である。さうでなければ道の本義に背く。さういふ譯であつて、而して其道は一體何であるかといふと、其道は所謂儒敎で申しますれば五倫の道であります。君臣、父子、夫婦、長幼、朋友、斯ういふ具體的のものであつて、決して其外別にむづか

しい高妙不可思議なものがある譯ではない。日本の道も矢張りさうであつて、教育勅語に仰せられてあります通り「克ク忠ニ克ク孝ニ」或は「父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ」といふ以外に、日本人の守る道ありやといへば、ないといつて宜い。何も道といつて妙不可思議なものではない。聖人君子でなければ行ふ事が出來ない、學者でなければ知る事は出來ぬ、さういふ不可知なものではない。何人も之を知る事が出來る。何人も之を行ふ事が出來るものが道であります。斯ういふ譯でありますから、道といふものゝ本義に對して考へて見ますと、漢學の道とする所と日本の道とする所と同じ事であると私は考へる。

然らば其道の本源は何か、其道は何處から來たのか、誰がさういふ道を發明し又作つたものであるか、即ち其道の起原如何といふ事になつて來ますといふと、教育の勅語には「皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ」といふ事がある。本居宣長翁の說にしても同じ事である。道はどういふ事を述べてあるかいふと、「天地自ら存す」天地の間に自然に出來たのである、人の作つたものではないといふ。即ちいつて見ると、高御產靈神の御靈に依りて伊弉那岐伊弉那美神に傳へ、それから天照大神より教育勅語の所謂「皇祖皇宗」まで行くのである。そこで漢學の方では道の本源は何れであるかといふと、道の本源は天にあり、人間は天地の化を受けて生れたのであるから天地の正しい氣を受けた人間の守るべき道を、天が附與し

たものであるといふ。そこで見ると天といふ事は、矢張り言葉は變つて居ても、我輩の考に依つて見ると、日本の神樣、天照大神なり伊弉那岐伊弉那美神は、支那の所謂天である。唯併しながら天といつてはあまり漠然たるものでありますから、そこで支那では聖人といふ者を立てた。聖人が天を代表して居るのであつて、支那の道といふものは聖人が天の意を受けて段々修め傳へて來たものである。例へば孔子は堯舜を祖述し文武を憲章す、昔の堯舜、文武、周公の思想を述べ傳へて居る。其堯舜は何かといふと聖人である。其堯舜の上にも聖人がある。伏羲神農黃帝皆支那の歷史にある聖人であります。伏羲といふ人は始めて結婚の制度を定めた、或は神農黃帝に至つて始めて百姓に農業を敎へるとか、或は醫術の藥を發明して之を國民に敎へたとか、或は又黃帝に至つて始めて文字といふものが出來たとか、音樂といふものを作つたとか、代々傳へて來て堯舜禹湯文武周公に至つたといふ支那の傳說である。それで韓退之がかの「原道」といふ文章にどういふ事を書いてあるかといふと、此道は自然支那の始りから來たものである、伏羲神農堯舜と相傳へて來たものである。吾々今日斯うやつて居るのは其聖人の力である、若し其聖人が無かつたならば支那の國は亡びてしまふ、米を喰はうといつても米が無い、聖人が農業を敎へたので喰ふ物がある、着物が着たいといつても着物がない、聖人があつて着物を授けたから着物がある、歷代の聖人の文化の力が重つて、支那が今日の文明を開いたのであるといふ事を論じて居り

ますが日本でも此通りであると思ふ。天照大神樣が米を見て國民の喰うて行くべきものであると仰せられて農事を國民に御示しになつた。或は機を織る事を御示しになつた。若しさういふものを御示しにならなかつたならば、吾々の喰ふ所の米も、或は着る所の着物も、或は無いかも知れない。かく天照大神樣を始め奉り歷代の皇室が吾々に生々存々の道を御示しになり、所謂相生じ相長ずる所の道といふものを受け傳へ受け傳へて、吾々國民を統治遊ばされた所に於て、日本の國といふものが其處に出來た。それであるから支那人の天といふものは、要するに我國の歷史から申せば所謂神樣天津神斯ういふ事であらうと思ふ、されば聖人は天の意志を代表して居る者である。故に孔子は堯の德を稱して、天に則つたものである、廣大無邊なものであるといつて居る。書經の堯典にどういふ事が書いてあるかといふと、堯の德は四方八方に輝き渡つて居ると述べて居る。丁度天照大神樣の御德が天が下をくまなく照し給ふと同じ事であります。されば總て歷代の支那の聖人といふ者は、皆天を尊び天を敬し民を愛する事を以て、其の大切な職責となして居るのであります。敬天愛民は聖學の神髓であります。さういふ譯であつて道の本源を說く所も和漢ならびに格別大して違ひはないといふ事を、私は思ふ次第であります。

其次にさういふ道といふものを天照大神や伊弉那岐伊弉那美尊が御定めになつて、吾々國民が受け傳へて來た、さうしてさういふ立派な道を行ふ心を御授けになつた。それが日本人の所謂眞心であります

赤き淨き心であります。其眞心を吾々がみな有つて居る。必ずしも學問したからあるとか、學問しないからないといふわけではない、身分が高いから眞心があるとか、身分が低いから眞心が無いとかいふものではない、貴賤上下學問の有無を問はず、總ての人が眞心を有つて居る。此まごころは本居翁、平田翁などの說に依ると、表裏のないもので要するに人情に本ついたものであります。「武士は物の憐れを知る」と申しますが、やはり此の眞心から溢れ出た意識であります。即ち日本道德は理性よりも情操に重きを置いた所が、特色であると考へる。そこで更に飜つて、漢學の道德といふのは何かといふと、禮記にも「人情は卽ち聖人の田なり」とある。といふのは總て聖人の定めた禮樂なり道德なりは人情に從つて出來たものである。例へば人が死んで悲しいといふ時に於て葬式の禮を聖人が作つた。結婚すればお目出たいといふ、聖人が婚禮といふ禮儀を作つた。總て人情に從つて禮儀を作つたものである。孟子が道德の存在を證明するに、どういふ言葉を以て證明しましたかといふと、矢張り人情から證明して居る。例へていつて見たならば、吾々が赤ん坊の井戸の中に落ちたのを見たならば、何人と雖もあゝ氣の毒だといふ感情を起さない者はありますまい。其不愍氣の毒といふのが人情である。其人情に依つて吾々が進んで行けば、天下國家をも安んずる仁といふ德になるといふ譯で、孟子の道德上の立論は人情に重きを置いて居る、所謂四端說はそれであります。さういふ譯であるから後になつて宋明理氣心性の學

が起り佛敎の思想に本づいて無慾を主張しましたけれども、それは決して漢學の本當の倫理的の基礎から來たものではない、佛敎や老子から來たものであります。漢學の方では慾を少くする、卽ち節慾寡慾といふ事はいふけれども、慾を根本的に絕滅するといふ考はない。「飲食男女人之大慾存焉」人間は腹が減れば喰べたくなる、一定の年が來れば色慾が起る、詩經などにも「國風好色不淫」とあります。後世斯う段々道學などといつて、非常に始終苦虫でも嚙潰して上下（カミシモ）でも附けて居るのを、漢學者の本色のやうに考へるけれども、それは多く後世の說から來たのであつて、本來漢學といふものはそんなにやかましい石邊金吉金兜みたやうなものでは決してない。打碎けたものである。さういふ所が日本人の性格になつて居る、又本居翁なり、平田氏なりの說も其点に就いては矢張り同じ事であります。どうも支那の方は後に段々形式的になつてしまつて、禮儀といふものは人間があつて禮儀が存在するのに、後の學者はそれを反對に禮儀があつて人間があるやうに考へた。それは間違つて居る。本當の漢學の根本の精神は、さういふやうなものでは決してない。そこで日本に於て所謂明き淸き心といふものは、漢學に於ては誠となつて居ります。人間に於て智仁勇の三德あるも、之を行ふに根本の誠がなければ智も本當の智にならない、勇も本當の勇にならない、仁も本當の仁にならない。誠が根本である事を、中庸に力說して居ります。それが日本人からいふと明き淸き眞心である、所謂止むに止まれぬ意識であります。

斯ういふわけで道の本源、定義及び其心理的の基礎等につき彼我比較し來れば、我國の思想と漢學の思想とは、大なる逕庭はない。逕庭がないばかりでない、同じやうに考へる。而して其道の具體的に現れたものが何であるか、卽ち漢學に於ては、五倫の道であります。又日本に於ては何であるか、所謂皇祖皇宗の遺訓である、敎育の勅語にあるのが卽ち日本の道である。日本の道も漢學の道も、抽象的のものではない。事實に就いての道であります。哲學者や宗敎家が考へる卽ち目に見えないものではない。目に見えて居る所のものが道である。親子の間の道、君臣の間の道、夫婦の間の道、朋友の間の道、皆具體的のものである。扨此五倫の道に就いて、是亦漢學の取る所の道と、それからして我國に於ける所の解釋とは、格別大なる違ひはない。唯併しながら茲に屢々問題の起る忠君といふ事でありますが、支那は易世革命の國ぢやないか、禪讓放伐の國ではないか、日本と全く違ふ、故に採るべきものでないといふやうに考へますが、併しながら之に就いては少しく我輩の見る所をお話しようと思ふ。

成程支那は易世革命の國でもあるし、禪讓放伐の國でもある。是は事實である。併しながら一體君臣の間に於ける道德を規定して、之を有力のものとなさしめた事は、誰の力であるか。私は漢學の精神を大成した孔子であると思ふ。そこで孔子は禪讓放伐或は易世革命などに就いて、どんな考へで居つたか果して之を賛成して居つたかどうかといふ事は、大なる問題である。我輩の見る所では賛成して居らな

い。抑々支那に於ける五倫といふ事をお話すると從來二說ある。古い所の五倫說、是は何であるかといふと、一つは父義、母慈、兄友、弟恭、子孝で家庭間だけの德である。親子兄弟の間にしか行はれなかつたものである。君臣朋友などに關する事はなかつた。ところが孟子や中庸を見ますと、始めて今日の五倫といふものが明かになつて居る。父子、君臣、夫婦、兄弟、朋友といふものが見えて居ります。それが道德の進化發展といふ事であります。昔は道德は家庭間に行はれただけでありますが、それが文化が發達し家庭間だけでは足らない。更に國家に及ぼし社會に及ぼすといふ所から、君臣といふやうな國家的の道德も、朋友といふやうな社會的の道德も、其處に自然に附加されたものである。道德の範圍が廣くなつて來た。かく廣くなるに從つて、自ら之を規定する道德的關係を生み出すやうになり、社會の先覺者が此點について規範を垂れ、或は君臣有義或は朋友有信といふ風な事となるものでありましよう。卽ち少くとも孔子其人などが、大に力を用ゐられたものと思ふ。卽ち孔子は「我行ひは孝經にあり我志は春秋にあり」といはれた。孔子の著述春秋は、君臣の義名分を明かにした書物である。卽ち孔子の時代に君臣の別が亂れて、或は臣にして君を弑する者あり、或は臣にして君の國を奪ふ者あり、さういふ亂世でありましたから、そこで孔子が之を懲すが爲に春秋を作つた。そこで段々春秋を讀んで見ますと、さういふ大義名分を明かにしたとは、幾多の證據を擧げる事が出來る。同時に孔子が又禪讓や放

伐を決して賛成して居らぬといふ事もいへるのであります。

今其一二について論ずれば、穀梁傳隱公四年衛人立晉の條に、春秋之義諸侯與レ正而不レ與レ賢也とあり。其の註に建儲非レ以二私親一、所三以定二名分一。とあります。又公羊傳隱公三年の故君子大居レ正といふやうな點を考察すれば、君主の位が直系に相傳すべきものである事を、孔子が適法と認めた事は明かであります。其の他詳細に春秋に照してお話すれば宜いのでありますが、時間がないからすべて略します。併しながら支那の歴史的事情は、孔子の聖と雖も之を如何ともいたしがたかつた。而かも私は斯ういふ事を考へて居る。支那は御承知の通り兎に角君臣の關係は、日本の如く圓滿に行かない。大義名分が十分行はれて居らぬから、それを成るべく矯正したいといふ精神から漢學が力を入れて說いてある。それが日本に來て日本固有の大義名分といふ事を助けたといふ譯になるのであります。又更に一方から論ずれば、凡そ君主としての心得方は、如何にしたならば國民を治むべきや、如何にしたならば天子たる所の位を維持する事が出來るかといふ君道を切實に說いたものは、支那ほど發達した國はあるまいと思ふ。少くとも帝王學の大要原則は漢學の中に包含せられて居る。支那の君道とは何であるか、之を簡單に申せば、敬天愛民の四字であります。先年獨逸人の著述にて、邦譯にかゝる帝王學といふ書物を見ましたが、此の點にはあまり觸れてない、支那の主權者は天子卽ち天の子である。天意を承け之を奉行

せねばならぬ。天意は萬民を生々せしむ。故に天子は民を愛せなければならぬ、天下は一人の天下ではない、天下の天下であるといふが、支那の政治道德の主眼であります。さて此天下は一人の天下に非ずといふ言葉を、文字通り日本の國に適用したらば、無論國體と容れませぬ。併しながら其意味を取り來つて更に日本の歷史に照らし見れば差支ない。現に日本書紀に於ける崇神帝の詔勅を拜承しましても、君主を立てたのは一人の爲ではない。一人をして贅澤を極め、或は好きな事をやる爲に君主を立てるのではない。君主を立てるのは國民の爲である、といふ事が明かであります。又歷代の天皇樣方皆さういふ心を以て御治めになつた事である。加之に日本は祭政一致の國體である、天皇は現神であらせられる。支那人の所謂君道といふ事は、日本の帝室に能く具つて居る事と、私は思ふ。前述の元田先生の進講錄にも此等の點に論及せられて居るやうであります。斯ういふ譯でありますから、私の考に依りますと漢學の精神と日本の道とは餘程似て居る。隨つて日本に於て漢學の思想が巧く行はれたものであると思ふのであります。然るに之に就きましては、德川時代に於て國學者たる平田氏であるとか、本居翁の如き人が、非常に漢學を罵倒した。其罵倒したのは多く、どういふ事から來たかといふと、一つは日本の國運が段々盛んになり、國民性の自覺した点もありましようけれども、一つは漢學の中の宋學を攻擊した、理氣の說を談ずる所の宋學を攻擊して居りますし、而かも今の本居翁なり平田翁なりの時に生榮

した所の俗神道、卽ち垂加神道、或は唯一神道、或は伊勢神道、そういふ神道は皆多くは其の宋學の流派から來たもので、其の多くは荒唐不稽な事が書いてある。例へば山崎闇齋の說いた土金の說、或は其他名法集要等といふ書物にはくだらぬ事が多く書いてある。成程平田氏の如き活眼達識の人が見たならば、俗神道を攻擊するのは無理はない、けれどもそれは宋學や或は其他漢代の陰陽五行の說から來た所の漢學に對する所の攻擊であります。本當の漢學の精神からいつたならば、決して平田翁や本居翁から攻擊せられるやうな点は、毛頭ないと私は確信するのであります。之に就いては其當時も、隨分議論がありまして、もう國學者自身の間でも反對論が起つた。例へば村田春海の如きは其一人でありますが、吾々今日から見ても、本居平田氏等の攻擊はどうも穩かでないやうに考へる、此事についてかつて本誌第三卷「道敎概觀」に論じた事があります。斯く論ずるといふと、私の今日お話しました事は、稍々水戸學と同じやうな譯であります。水戸の學問では一面には我國の神道を尊び、一面には孔孟の敎へを尊ぶ事は、會澤氏の新論又かの弘道館記などを見ても明かでありまして、其見る所極めて公平であると考へる。けれども私共今日大正の時代に至つて、日本の國の道といふものを主張する所に於ては、水戸學派だけでは不十分であつて、もう少し進步的の考を有つて行かなければなるまいと、私は思ふのであります。尙ほ色々詳しい事は時間も要しますので、是で御免を蒙ります。

書經　蔡仲之命

皇天無親、惟德是輔。民心無常、惟惠之懷。爲善不同、同歸于治。爲惡不同、同歸于亂。爾其戒哉。